

平成元年度放送利用の大学公開講座の番組制作報告

“先生、わかりやすく” —をめぐって

民間放送教育協会 プロデューサー 井出 定利

1. 今年度の番組から

今年度の一番印象に残った番組は、テレビでは、信州大学—信越放送「信濃の民俗音楽」ラジオでは、北海道大学—北海道放送「口承文芸の世界」であつた。もちろん講座全体を視聴指せていただいたわけではなく、そのうちの1～2本なのであるが、シリーズとしてもこれらの番組は視聴者の反響が大きかったようである。

いい、作品には反響も大きい。「信濃の民俗音楽」については、その放送によるこだまの良さと大きさについて田中学生部長、講師の村杉先生、番組担当の青木さんの報告書によって、それは示されている。受講生からの感謝状、大学の授業への利用と学生からの好評、テレビの機能の十分な発揮、民俗芸能を西洋音楽の音から見ていくという発想の良さ、音を中心にした撮影努力等々、私も戸隠神社におけるスクーリング（平成元年11月5日）に出席させていただいたが、出席者約150名、地元に残る、或は消えかっている民俗芸能を見ながらのスクーリングで反響の実際を感じることができた。「口承文芸の世界」も反響が大きかったようである。そのことは北大の高橋先生の報告にも明らかであるが、番組担当の日野さんの次のような言でも手応えが伝わってくる。「総合的に見て、今年のテーマはラジオメディアの持つ特性にマッチしたものであり、最近の生涯学習の盛り上がりの中で、学ぶことの楽しさや活力を、ひいては勇気を与える講座になったのではないかと思う。そう実感した年度であった。

タイトルの音楽の選曲もよかったと思うが、特に良かったのは第4回「山姥」の場合、主任講師の先生が冒頭で、「日本には絶対的な悪魔というものはない。今回はそれを証明してみましよう。」という案内があったことであろう。今までにこういうシャープな言葉で番組が始まった例はラジオでもテレビでもなかったのではないかと思う。この言（運び）の良さは幾つか考ええられるが、一つは今回の内容の到着点が実に明確にされていることである。この回で何が達成されればいいのかを明確にすることは大学講座の視聴者にとっては大変ありがたいことである。二つはこの案内の言葉に含まれている心意気である。〇〇について証明しましよう—という入り方ではなく、明快な意図と内容へのシャープさをもって、交響楽を聞くような番組”を成立させるにはもってこいの導入である。

昨年度の番組コンクールでラジオ部門の1位をとった「中国の詩人たち」（東北大学、東北放送）を、審査委員長が“交響楽を聞くような番組”と評した。ラジオ講座の印象上、制作上のキーワードや目標点としてもいい言葉であり、ラジオの講座番組の性格を言い得て妙といえよう。ラジオの講座番組の良さは、言葉（論理）だけによって創りあげるイメージの世界に透明感があって、これがラジオ講座のもう一つの武器なり良さなのかと思う。

今年もまた局担当者から幾つかの制作上の視点が出された。

○映像を意識したテキストづくりを要請（北海道放送）

- スクーリングには関係者全員が出席し制作上の参考とする。(東北放送)
- グラフの単純化、省略化(新潟放送)
- 画像の指示矢印を、D V Eで動かした。(北陸放送)
- フリップを倍サイズに変更し情報量を減らすと共にカメラによる寄り引きを止めた。映像化が不可の回もあった。映像手段を思い浮かべながらテキスト執筆をお願いできたら(名古屋テレビ)
- 放送形式には各回自由にした。画一的でなくてもいいと思う。(東海テレビ)
- テキストと台本の関係は、全体をちぢめると失敗することが多く、一部を深くすると全体像が見えにくい。(毎日放送)
- 講師を数人にしぼった方がいい。図表が多いとあきるので、一部をCG化したのが苦勞した。(中国放送)
- 地域性と「現代」を重視したテーマを(熊本放送)
- スライドやV T Rを指示棒で指せるように工夫した。(沖縄テレビ)

これらのうち偶然にも共通して上げられていることが2つある。一つは図表(フリップ)の表現の仕方であり(新潟放送、名古屋テレビ)、もう一つはテキスト執筆の際に映像をイメージして書いて欲しい、という要望である(北海道放送、名古屋テレビ)。

前者はその通りであると思う。図表は簡略化され印象化されればされるほどいいと思われる。また図表の寄り引きも原則的にはやめた方がいい。寄って部分をUPすれば図表のもつディテールや意味がかえって失われることが多い。図表は寄り引きなしでフルショットで分かるものもいい。ただ省略化に関しては短に図表の問題だけにとどまらず、番組全体としてこの回で何が達成されればいいのかをうんと絞り込んだ上で出てくることであろうと思う。この整理がないとどうしても図表のつめ込み、盛り込みの問題が出てくるようである。

後者はいろいろな問題点を含む。大学講座は体系的な学問の世界だけに、いわゆる画(え)にならない所は沢山あるし、そういう所には逆に論理(言葉)がある。この論理の世界も大事に、むしろ武器にしないと教育番組は成立しないところがある。また無理をして映像化するとかえって学問の内容からずれてしまうという調査発表ある。かといってメディアの特性を無視して番組をつくっても視聴者の支持は得られないことも確かである。こういう難しい性質の番組であり状況の中で、テキスト執筆の際に映像をイメージして書いていただくことは、従ってそれ自体プロフェッショナルな能力を要する。先生方のご負担にもなるし、むしろ表現手段を担う局担当者の責任でもあるように思われる。今後の論議をまちたい。

2. 先生、やさしく(或いはわかりやすく) — について

1) 理解とテレビ(ラジオ)

さて私どもは文学講座のように理解を目的とした場合、特に体系的な理解を目的又は前提とした時、時間を絶対軸としたテレビ(ラジオ)にはその内容が乗りにくくなる、ということをもう一度再認識する必要があると思う。

理解とテレビとの関係についてはまた、次の研究にリポートを借用したい「……教育番

組の場合は理解されるということがほぼ絶対の条件である。そこでは『理解』が『発見への好奇心』に優先して内容全体を支配する。あるいは『理解』という鍵がないと『発見への好奇心』は触発されない、と言った方が正確だろうか。……教育番組は他の種類の番組とは異質であり、時間的構造を持つものの中の鬼っ子であるといえる。やさしく言えば、テレビというメディアに極めて乗りにくいということである。……それにしても、かなりの人が教育番組を『時間的構造』のままに見ている現実、教育番組の企画者や制作者にとって多くのことを考えさせずにはられない。即ちVTRが教育番組の時間性をかなりの程度コントロールできるからといって、VTRの能力を前提にして番組を制作するのは問題がある、ということである。そして『発見への好奇心』は教育番組においてもなお必要不可欠な要素であり、その要素で追っていけば何らかの『理解』につながるという番組が、依然として求められていることを、われわれに示唆してくれるのである。』〔「ビデオテープ・レコーダーの調査とその考察」野沢卓二氏、社会教育開発センター、MME研究ノート、'86No26〕

この研究レポートは、テレビ番組を録画（VTR）で見ると、見るときはthrough（スルー）で見ると、Stop&Repeatで見るとの調査から出発した研究発表であるが、その鋭い指摘は大変参考になった。くり返して結論的にいえば、理解を前提とした時、それは「時間」に自由な活字メディアに一步ゆずる。特に体系的な知識や理解（＝教育）の場合には——ということであろう。

そこで、例えば広島大学—中国放送の当年度の番組「身近なバイオテクノロジー」の第2回「遺伝子とバイオ」で考えてみよう。今年度の視聴した番組の中では、自然科学系のもつ問題点を沢山かかえていると思われるからである。これを担当した中国放送の平本プロデューサーは、図表が多いので視聴者があきないように且つ理解を助ける意味で、少しでも図表を動かす試み（・CG）をしたが、ちょっと動かすだけでも7～8時間かかってしまい苦労した、と語っておられた。その努力には頭がさがるし、図表の書き方や出し方にも工夫がこらされていた。講師の小林先生の話ぶりも悪くないし、とにもかくにも受講生に理解してもらおうという姿勢も画面から伺うことができる。取材映像も入れられる所には全部入っている。にもかかわらず私は、よくわからない、面白くない、という不満が残った。

こういう感想はこの番組だけでなく、多くの自然科学系の番組に感じるものであるが、これは一体何故なのだろうかと思う。恐らく一つには、前述したように理解されることを望むあまりにテレビの機能の一番不得手なところで番組づくりをしてしまっているからではないかと思われるのである。

次にテキストを読んでみた。感想としては遺伝子を究明して行く歴史と応用過程が、簡潔に体系的に書かれており面白く読ませていただいた。読み出して、前の頁へ行ったり先へ行ったり又戻ったりもして、細部のことはわからないながらも、成程とある程度理解できるまでには凡そ70分かかった。つまりこの内容をある程度“理解する”には、前にテレビを見ていたとは言え70分位の時間が必要であり、それも前の頁に何度も戻ったりする自由さを持った形式のもの（テキスト）であることが必要ということになる。換言すればこ

の内容を45分という絶対的な時間軸をもち、わからないから前に戻って見直すということができない放送メディアに乗せる時、どういう作業が必要かということになる。

放送公開講座の番組化について考える時、もう一つ頭に入れておいた方がいいと思われる表現上の制約条件(?)がある。

文字による認識構造	映像による認識構造
分析的	総合的
論理的	感性的
明快な表現	曖昧な表現
一義的な解釈	多義的な解釈

(マスミ論Ⅱ—大衆分化とマスメディア、広瀬秀彦教授'84)

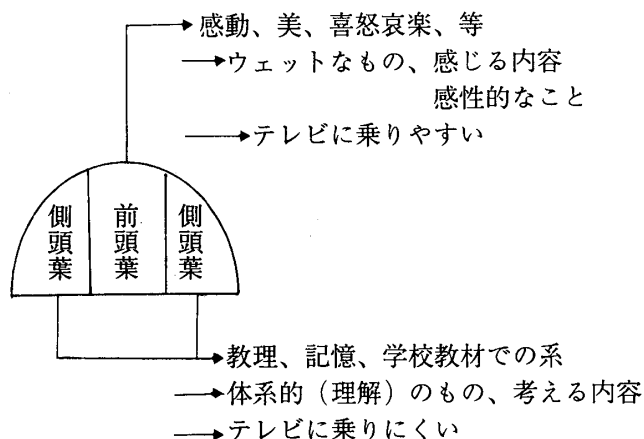
左の表は、かつて放送大学の番組の中で示されたものである。このような両者の差異は日頃私達が漠然と感じていることであるが、このように整理されて示されると改めて注目せざるを得ない。この差異をめぐる問題は以前に発表さ

せていただいたのでここでは省略して、左欄(学問的世界)のものを右欄に乗せて行く時、どのようにな作業が必要なのだろうか。流行している言葉で言えば左脳的な内容を右脳的理解に置きかえて行くにはどうしたらいいのか?ということになるだろうか。

2) ベルトコンベヤーの発見やその他

「先生やさしく」というお願いでそれがすめばいいが、大きな問題解決にはなりそうもない。大事なことは、難しい理解の内容をやさしく、わかりやすいことに変えて行く“何が”の発見であり開発ということであろう。その一つの道具は、いわゆるCGであろう。将来この普及と利用が多くの問題を解決してしまうように思われるが、現状ではひとまず措ざるを得ない。あとはどのようなことが考えられるだろうか。

テレビは画像と音声の機能を備えている故に、現在のマスコミのメディアとしては一番人間に近い機能を持っているといえるだろう。そこで人間の思考パターンから何かヒントのようなものが得られないだろうか。



左図は脳の機能地図を前頭葉と側頭葉に分けてその働きを考えてみたものである。もちろん独断による私だけの脳地図であり概念図である。こうして整理してみたのは、大学講座で扱う学問的内容(側頭葉的内容)は、前頭葉な要素を媒介にして論ずるようにすれば、もっとテレビにのりやすくなるのかな——ということである。そういうことを言いたためにあえて図

示してみたのであるが、この図に拠って図式的に言えば次のように言えるだろうか。

教育番組のような体系的な知識や情報は、まず前頭葉的な要素(ウェットなもの)によってテレビに乗せやすくするためのベルトコンベヤーのようなものをつくり、それに側頭葉

的な内容、つまり体系的な知識や情報をのせて行く——こんな方法が考えられてくる。或いはこうも言えると思う。百聞は一見にしかず、とか、映像は文字に書かれたものに比べてわかりやすい、理解が早い、とかよく言われる。この理由の一つとしては、映像は考える内容を“感じる”ことにおきかえていからではないだろうか。もしくは“考える”ことを“感じる”要素で包み込んでいるからではないだろうか。映像的な理解の質とはそういうことであり、そのためにわかりやすい、とか理解が早い、とか言われるのではあるまいか。感じる内容がテレビに乗りやすいならば、体系的で高度な“考える”内容を、やはりそのような要素に乗せたり包み込んだりしてやる方がいいと言える。

前頭葉的な要素を捨て去って、側頭葉的な内容だけで押していくと、時間的な構造をもつテレビは弱い力しか発揮できないように思われる。そうではなくて、テレビは色々な厚みを出せる訳であるから、ウェットなこと、感じる要素によるベルトコンベヤーのような流れに、恰も小荷物を載せるように、理解すべき内容を盛り込んで行く。これが理解を助ける一つのいい方法かなと思うのである。この事例としては昨年度のコンクール1位となった新潟地区の「脳浮腫」の作品がいい事例としてある。そしてその結果としてコンベヤーで運ばれていった先が、テキストとは違った到達点であったとしてもそれはいいのではないかと思う。テキストとは違った質の理解をしてそれは肯定できるものではないかと思われる。

そこで前出の「遺伝子とバイオ」に戻る時私達は何ができるのだろうか。言うは易く行いはなんとやらの言を俟つまでもなく、具体的な作業となると大変難しいことであるが、考えられることを列記してみると——

- a) 構成をぐっと考える——テキストを同じ構成でやったら前記の私の体験のように、理解という点で恐らく失敗する。この場合、構成の手法で大いに参考になるのは、視聴者をひっぱって行くための「発見への好奇心」（野沢氏）という視点であろう。前掲「脳浮腫」はこの点でもうまいものであった。
- b) テキストとは到達点を変える——流れる時間の量と質が違うということは、認識の仕方も違うし、理解の質も違ってくると思われる。
- c) 説明の仕方の構造化、複雑化の試み——遺伝子とその複製、組換えなどを、立体的模型化、ユニット化して説明できなかったか？
- d) テレビに乗りやすいウェットな視点（ベルトコンベヤー）を持ち込む——偉大な発見者、グリフィス、エイブリー、ワトソン・クリック、コーエン等にスポットを当て、いかにしてそれを見つけたかという歴史的な流れを持ち込む。
- e) テレビ的な“感じる”キーワードを見付けて——テキスト27頁に（組換えDNA技術について）“これが如何に驚異的な方法か”——といういい言葉がある。この言葉がもつウェットな或いはエモーショナルな陰影はテレビに乗りやすい。ベルトコンベヤーや牽引車とするには十分である。制限酵素（ハサミ）の発見という驚くべきことにも重点をおいて“驚異的”な内容を語る。この場合テキストのような“体系的な理解”の配慮は落さざるを得ないが、感動と理解といういい図式を生みやすい。テキストとは離れるが上記①や②の理由によってそれで十分であるように思われる。

以上のようなことはみな連携しあっているが、局担当者の制作上の作業、つまりテキストの内容をどのようにテレビに乗せて行くか、という作業の中味としては考えられていいことのように思われる。もちろん担当の講師の先生と十分に話しあいながら決められて行くことであるが。

学問の内容は早々高度化して行く。その時、「先生、とにかくやさしく」という願いは、幾つかのわかりやすくするための方法論を持参した上でのことでありたい。